

学校訪問旅行記雑感（その一）

村 田 修 子

昨年は私にとって、さまざまなことで記念すべき年でした。

その一つは「文部省教員海外長期派遣」の一員に加えて頂いて、アメリカ、ヨーロッパの教育事情等を三十日間にわたって見て歩くことができたことです。

その視察は一か所に四泊五日ずつという割合にゆつたりとした計画なので、いろいろな部面の実際を見せく頂くことができました。また、見るだけではなく、さまざまな経験をすることができましたので感慨もひときわ深いものでした。感じたまま、それらを述べてみようと思

いますが、こうした長期の旅行では、本文の学校視察以前の段階の部分のすこし方がどうしても大切なことですので、これから述べてみたいと思います。

* * *

私もずっと長い間「秋」という気候もよく、自然の美しさを満喫できるときに旅行をしたいとつねづね思っていました。けれども仕事の関係上それはできませんので、前期と後期の間には中間休みがある大学生をうらやましく思っていました。

ところが「長期海外派遣」の幼稚園の班は丁度秋に当たってしまいましたので、その点ではうれしかったのですが、もったいない話ですが旅行自体はなんとなく憶効でした。よその国の子どもたちが、また先生方がどんなふうになっているの、ということなどに関心がないわけではないのです。いつも外国に取材したテレビ番組を先ず第一に見るほどなのですから喜んでいいはずなのですが、なんとなく気が重かったのです。自分でもなぜか、と覚えてみました。結局それは、ことばの問題だと思われました。それには理由がありました。

以前、まだ自由に渡航ができなかったとき、全く何も分らないのに一人で東南アジアに出かけたことがあるのです。そのとき、飛行機に乗りおくれそうになったり、原地の個人の家庭で風習が分からないために、いろいろな気を使わなければならぬで大変につかれたり、警官に注意されているらしいのに何も分からないで困ったり、というような経験があるので、ことばが分からないのでは本当に大切なことは理解できないし、その他の生活すべてが思うようにゆかないのなら、さまざま犠牲を払って出かけるには効果が少ないのではないかと、ということがとても気になったからです。こんな気持ちでくすぐずしているうちに、もどんどん時が過ぎて、出発の日が来てしまいいその流れのまま出かけた、という状態でした。

何故このようなことに話がいつてしまったのかといいますと、そういう気持ちで出

掛けたのに、アメリカで過ごし、ヨーロッパに入り、次第に帰国の道順になりかけた時、「もうあと〇日になってしまった。帰りたいくない」といったり、思ったりするように変化してしまつたのです。

それはことばの不自由さとか、余り知らない人たちと一か月も過す気苦労など杞憂であつて、大変有意義に過ごせたからだと思います。

外国を旅行した人がよく言うように、「世界は一つ」で、特に同じ仕事にたずさわっている人たちとの交流は、単語を並べることとで、また顔、表情で、指先で、心で分かり合えるのです。もちろんことばが十二分にできた方がよいに違いはありません。私も残念に思つたことがたびたびでしたけれども、それは二次の問題であるということを実際に身をもつて感じたのです。

いうならば、それだけ子どもたちの教育にたずさわっている人たちの心は、どこで

も同じだということができると思います。

* * *

先ず第一の訪問地はアメリカのニューヨーク州のユティカという小じんまりした都市でした。

そこに行く前に羽田から先ずついたサンフランシスコでは、時間調整のためにゆくりすごしました。この間に団員の名前と顔が大体分かつて、うちとけた雰囲気になることができました。このもつたいないように思えたこの時期がそれ以後の学校訪問を、そして毎日の生活をなごやかに過ごすもとを作ってくれたようので矢張り必要であつたことを痛感しました。

またここでは丁度御訪米中の両陛下の本土に於ける最終日といつしよになつて、日本びいきのバスの運転手さんの「自分も是非ヒロヒトに会いたい」という希望であと

を追ひ、金門橋でその望みを果し、(この時のことは帰国後或るグラフを見たとき、兩陛下のお車の後方に私共の乗ったバスがとまっていたのを見つけて感激を新たにしたら)再度ご出発なるときホテルの入口附近でお送りしたことなどは、みんなに「日本」を身近に思い出させて、それを契機として話はずみ、一層のまとまりができていったことは非常に幸せなことだったと思います。

私たちは子どもとのかかわり合いについて、先ずお互いによく気心を知り合わなければ何の効果もあげることができない、とよくいいます。おとなの場合でも全く同じで、一か月間も寝食を共にしてよい雰囲気、で過ごすためには、どうしてもこのまとまりが必要なのです。

それ以後は終始どういふときでもお互いに助け合いながら過ごせたことは、何にも勝る収穫であったと思っています。

さて、ユティカ (UTICA) の話に戻りますが、今迄に一度も聞いたことのない町、余り大した期待もしないで、ただニューヨ

ーク市 (マンハッタンのホテルのあったあたり) の灰色によどんだような空気が、常に気が許せないような緊張感から早く解放されたいという気持ちだけで機上の人となり、五十分という短い間に慌しく軽食をとり、それが終るか終らないうちに着陸態勢に入った感じなので下を見ると、ほかの飛行機も自動車も、機械類などもなにもなく、ただ一面緑の芝生の中に滑走路が開かれ、飛行場の周囲の立木は見事に紅葉し、その美しさに「きれい」と言ったあとしばらくはことばも出ず、ただ周囲を見回しているうちに空港につきました。

その空港におり立つと、のんびりとした様子を裏付けるように、迎えるバスは来ていないで、建物の前にひろがる芝生はただ青く、私共二十九名を除いては誰の姿も見

えないので、視察国のアメリカの概念とは全くちがいました。

飛行機という文明の最先端になっっている利器と無人の野原、美しい自然の中に置かれたほんとに小さな自分、安らぎを覚えると同時に不安にもなりました。いろいろな感慨が次から次へと湧いてきました。連絡をとって始めてやってきたバスに乗りこみ、すばらしい紅葉の続く道を通り、前庭に花の咲いている西洋風の家々を楽しみながら、三十分程でホテルに着きました。

バスをおりるやいなや、にぎにぎしい英語の挨拶に迎えられました。

それは私たちのつかれをねぎらうために費用を出し合って開いてくれた晩さんパーティに集まった、ユティカの教育関係の方たちでした。

固苦しい挨拶も余りなく、ただ私たちの心をやわらげようと、マン・ツー・マンで飲

UTICA CITY SCHOOL DISTRICT
Japanese Education Study Group
Schedule of Activities

<u>DATE</u>	<u>DAY</u>	<u>ARRIVAL</u>	<u>PROGRAM</u>	<u>LOCATION</u>	<u>DEPART</u>
Oct.15	Weds.	8:45 AM	Heart Disease Prevention	Columbus School	9:30 AM
		9:45 AM	Kindergarten LUNCH	Hughes Hughes	
			Multi-Age Grouping	Hughes	3:15 PM
		3:30 PM	Holiday Inn		4:45 PM
		5:00 PM	*DINNER	Grimaldi's	7:10 PM
		7:30 PM	Dance Workshop	Jefferson School	9:00 PM

物から食事の総てをこまごまと世話をしてくれました。

公の場で始めてアメリカ人に接すること
で固くなっていた私共も、その暖かい心づ
かいに、思ったよりずっと早くなじむこと
ができて、片言英語で話し、足りないところ
は手振り身振りで補いながら、二時間程
を楽しく過ごすことができました。外交辞
令にしても、「自分たちが日本語を少しも
できないことを悲しく思う」といつてくれ
たことばに、「私たちはあの人たちよりは、
ほかの国のことばも少しは分かるのだっ
た」と思い直すことができました。

まるで昔の知己が戻ってきたように心か
ら歓迎してくれることに戸惑いを感じ、自
分たちが逆の立場だったらこのようにでき
たであろうか、と反省しながら、心易くなっ
た方々と共に明日から始まる学校参観に意
欲をもやしました。

本当に全員が思ってもいなかったのびの

びとした自然の美しさ、それにも増して暖
かい人と人とのふれ合いに、日本を遠く離
れている心細さを忘れてしまったひととき
でした。

その後、旅行中みんなの会話の中に、
「もう一度アメリカに行くことがあった
らユティカに行く」

「どこかに移り住むならユティカがいい」
こういうことがよく聞かれました。

上にのせたプログラムでも分かるよう
に、朝早くから夜おそくまで、献身的に尽
してくださったその暖かい心のふれ合いが
あったからこそ、だと思えます。

* * *

ユティカでの学校訪問

全員で二十九名でしたが、多人数の参観
を好まないらしく、三班に分けられ、それ
ぞれのスケジュールが組まれていました。



◀ 毎朝の説明会

それぞれの班の当日の計画について、毎朝八時から係のミセス・フリードが親切に説明をしてくれました。

私の属していた二班の例をあげてみますと、表にあるように、いろいろなシステムによるクラスを見ることができました。

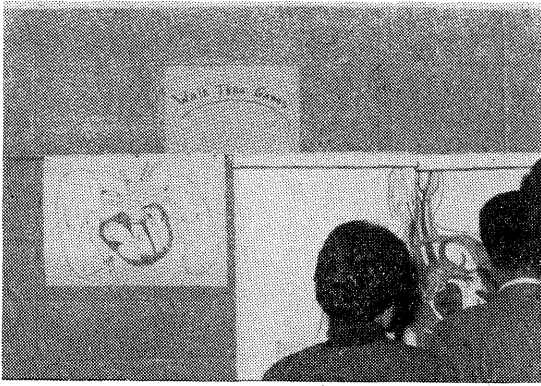
○第一日目の最初のハート・デイズ・プレベンションについては前もって字引によって「心臓病の予防」と附記しておきましたが、それが学校でどのように展開されるのが、全然見当がつかないことでした。

コロンブス・スクールの体育館に、人体図に、心臓から出る血管（動脈・静脈）がよく分るように書いてあるのがはってあり、心臓に関する本が並べられていました。

そこへ五、八歳の十八人位の子どもたちが並んで入ってきて次のようなことを行なっていました。

- 握りこぶしを作って胸に当て心臓の大きさや、位置を意識する。自分の手首を握り脈をみる。
 - シャがんだ姿勢から両手をあげて跳び上る。
 - 両脚を開き両手を横にあげ、片手を反対の足先につけて体を捻転する。
 - あぐらをかいて二人向き合って座り、ボールをころがし、つかまえる。
 - 片足跳をする。
 - 両脚跳をする。
 - 十人位で円を作り、手をつなぎ左の方や右の方に走って回る。
 - 三組に分れて折り返しのリレーをする。
 - 前と同じように握りこぶしを作り、胸に当てる。
 - 心臓からの血管の書いてある図の上を、実際につたって歩く。
- これ等を見ただけでは普通の体育の時間に活動をしているのと同じで、特別のこと

◀ コロナプス・スクールの
ハート・ディズィズ・プレゼンション



をしているように見えなかったのですが、説明を聞いてそのねらっていることがやっと分かりました。

概要は、アメリカは、栄養摂取の関係や運動不足等が原因で、大変に心臓病の人が多く、それで早く死ぬ人も多い。そこで予防策として食生活の反省や、生活習慣の改善などの根本的な対策がとり上げられています。こうした社会的な問題が即学校教育の中にとり上げられているということに、アメリカの積極的な姿勢というものがよくうかがえました。

● 全生涯を通じて体をきたえる習慣をつける。

● 自分の健康を保つためのことを身につける。

こういうねらいをもって一九七四年から、正規の授業に加えて特別なプログラムとして毎日十分位ずつ幼児を対象にやっているけれども、今後はハイスクール迄実施

して、二十年、三十年と続けて、この運動が家庭の中に自然に普及するようにする、ということでした。

日本でも次第に心臓病が多くなってきたと聞きますけれども、まだとてもここまでの見通しはありません。

生活様式、国情、物の考え方の違い、というものをしみじみと感じました。

○キンダー・ガートン

二班の十一名が更に二つに分かれて参観しました。

A組・保育的活動——一週間に一度体育専

科教師がきて指導に当る。

● 手洗い、うがい、おやつ。

● 音楽の中に物語を吹込み、静かに聞く。

● 絵を見て言葉や文章を正しい発音で語尾まで練習する。また同時に絵の



◀ キンダー・ガーデン

内容について興味を持たせるようにする。

●自分たちで作った家に関係あるものを週刊誌などから切りぬいて、その家の中に入れていく絵画製作の活動。

B組 ●一から五までの数を順序数、逆数で言わせる。

●八文字までの言語の記憶。
●交通信号などを使って色を言わせる。

●蜂になって遊びながら、数やことばの訓練をする。

●消防夫になって遊ぶ。
●音楽専科教師の指導によって、レコードに合わせて体操をする。

以上のような実際を見せて頂きましたが、プログラムにあるように、子どもたちは先生を中心に大変静粛に、課題に取り組

んでいました。一日のうちのほんの一部分だけですから何とも言えませんが、教師の働きかけに対する反応が落ち着いた雰囲気、小さい子どもながら場をわきまえて行動している、ということがとても印象的でしたし、子どもをしっかりと握って自信を持って、或る種の威厳をさえ感じさせるような態度で接し、しかもやさしく美しく、その上熱意にあふれている先生方に敬服し、大いに反省させられました。

大変活発で自発性に富んでいる、といえはよくきこえますが、おとながひとこと言えれば三ことも四ことも先を争って大声を張り上げる現在の日本の子ども。今の子どもは分らないと自信なげに手を引込めてしまふ親、教師。私は「これは大変なことだ」と思いました。終戦直後、これと同じような気持ちになったことがあります。それは社会のルールも、道徳的な判断も何もなく、全く思ったまま行動して恥かしいこと

を知らずに巻をうろろして育っていた多くの子どもたちを見たとき、「一体、この子どもたちが大きくなったときの世の中は、どんなになるのだろうか」と気になりました。

しかもその期間というものは、その世代の者が生きている間続くことを考えると大変不安でした。さまざまな不安な事件を聞きますと、あのときの心配がやはり本当だった、と思わないではいられないのです。丁度それと同じような気持ちなのです。何年かたったとき、あの子どもたちと、日本の子どもたちの間には取りかえしのつかない差ができるような気がするのです。

報告書の団員の感想に、その美しい先生方が、ひとりひとりの子どもを大切に、その能力に応じ、個性を尊重した指導をしているところに大変得るところがあった、と書かれた方が多かったです。それらの大切さに加えて、子どもたちに信頼され

る雰囲気をもった教師にならなければ、と思うのです。

けれども日本にはかなり問題があるわけではなくて、アメリカにはまたアメリカのなやみがあるようです。(この点については、ヘッド・スタート、という制度で述べることにします)。

一組の人数が二十四名位で、教師一人に補助員が一名いることなど、国情の相異をまざまざと感じました。

入園するに当って入れない子どもはないらしく、従って競争になることもないことなども全然情況がちがうのです。

九月に入園する子どもに対しては、1 ユティカとしての共通のガイドブックを父母に配布して幼稚園についての理解をしてもらう。

2 子どもや父母に対する質問事項をそえて、教育長名で各家庭に手紙を出す。内容としては、幼児のことば、感覚、家

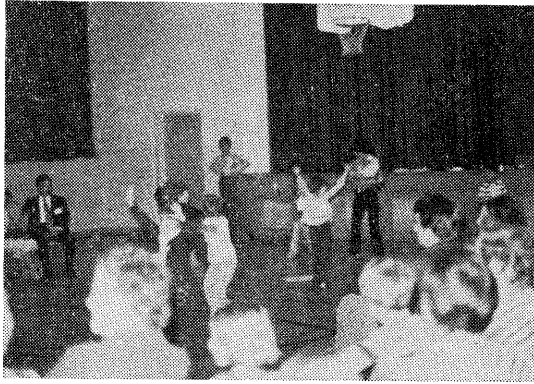
族の状況、親の協力できる度合、運動能力(歩く、スキップ、ジャンプ等)視力、聴力、心理テスト、ことば等、それぞれの立場から観察して個人のカルテを作成する。

3 それぞれのカルテが集計されると全職員が集まって、すぐれている点、不足している点、補うべき点、父母、教師は何をすべきか、などを検討して決定する。

4 一か月に一度、校長を中心にミーティングをし、ひとりひとりの子どもに対しての計画を話し合う。

これ等はすべて、個々を大切に指導している扱いであることがよく分かります。

面白いと思ったのは、クラスメイトの父の職業を理解してもらうために、それぞれの子どもに父親に仕事着を着て園に来てもらい、紹介し親しませている、など、家庭とのつながりをも大事にしていることがよく分かりました。



◀ダンス・ワークショップ

意外であったことは、うらやましくらい広々とした芝生の庭を持っているところが殆どでしたが、そこで小犬のように走り回り、ころげ回っている活動的な姿は余り見られなかったことと、子どもたちが大好きなぶらんこなどの設備も貧弱で、全然見当たらない園もあったことです。

○マルティ・エイジ・グループ

幼稚園から八学年まであるヒュース学校やその他二、三の学校の中で行なわれている試みのようです。学年のわくをはずし、たて割りの編成で、午前中は Language, Reading, Writing に中心をおき、午後は数学が行なわれます。そののちにホームルームに帰って社会や科学、音楽などの学習をします。

●このねらいは、
●個々の生徒の進度に合った指導ができる

る。

●子どもたちが自らを律していく力や、社会性、親切心を培うのに、年齢のちがう共同体の中の方がよい。

という考え方にもとづいて試みられているようです。

けれども六歳から九歳迄の子どもを対象に、年齢の低い子どもと、年齢が高いが特に能力の劣る子どもを中心に編成されているところもあって、二十八名に対して四名の担任がそれぞれ二名ずつのチームを作って指導しているなど、理想的な型のように思われますが、問題点としては、指導にとても時間がかかることだそうです。

ここでも子どもの進度に応じて与えるテキストや教材、教具が、その段階に応じて多様に豊富に用意されていて、きめのこまかい配慮がうかがわれました。

けれども六、七歳の算数を見る限りでは、十までの数が理解できない子どもが

なりあって、その表情も楽しそうには見え
ず意欲的とは思われませんでした。

○ダンス・ワークショップ

これは私たちのために開かれたものでは
なく、普段子どもたちの様子を見られない
仕事を持っている親たちに見てもらうため
の催しに出席したのです。

ダンスを専門に指導している教師（何校
かを受持っている）の合図で、スキップや
その他の歩法などについて年齢のまざった
三十名位の子どもたちが順々に動作し、年
齢の大きい子どもたちは、レコードと、教
師の打つタンバリンのリズムによって、基
本的な動きや、与えられたテーマを自由に
表現するのです。

その自由な表現の前に、親に対して、こ
れからすることとか、子どものリズム感な
どについて教師が解説をして理解させま

す。

最後に、父兄の希望者をも参加させて、
自分の子どもと共に体を動かし創作的表現
をするまで発展させます。

子どもと共に過ごすことの少ない親に対
する啓蒙としては、親自体も参加してやる
という扱いは面白いし、効果も上るのでは
ないかと思われませんが、夜おそくから始ま
る、という時間的な制限があるせいでは
うか、一つ一つのやることをつつ込み方が
少なく、子どもが待つ時間ばかり多いよう
に思われました。

ここでも待つ間の子どもの落着いた態
度、がまん強さ（もう身についてしまっ
て特別にがまんしているわけではないの
かも知れません）には本当に感心してしま
いました。

（つづく）

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼児の教育 第七十五巻第五号

五月号 © 定価二〇〇円

昭和五十一年四月二十五日印刷

昭和五十一年五月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします